archive
vol.35

A-Lab archive

A-Lab Exhibition Vol.33

# A-Lab Artist Gate '22

上続 ことみ

徳永 葵

長田 綾美

前 瑞紀

前川 琴瑚

宮本 美紗季

山口 和真

**新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-Lab Artist Gate」**

本プロジェクトは今後の活躍が期待される若手アーティストによるグループ展。大学を卒業か大学院を修了され新たなステップに羽ばたこうとしている若手アーティストをご紹介するプロジェクトです。

A-LAB archive vol.35

# A-Lab Artist Gate '22

目次


■ 出展作家 1

上続ことみ 1
徳永葵 3
長田綾美 5
前瑞紀 7
前川琴瑚 9
宮本美紗季 11
山口和真 13

■ワークショップ　前瑞紀 「紙屑屋」 15

■アーティスト･トーク 17

■フライヤー・配布資料 32

■ 出展作品

## 上続 ことみ　Uetsugu Kotomi

2000年 生まれ。和歌山県出身。
大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。

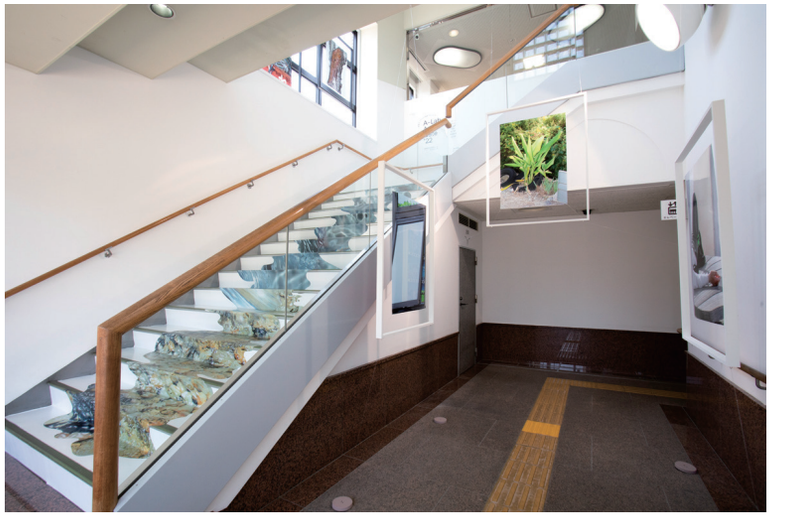
【近年の主な展覧会･受賞歴】
2019　仁川国際写真祭　奨励賞
2020　NEW JAPAN PHOTO10 in Dubai、ドバイ
2020　済南国際写真ビエンナーレ、中国　など

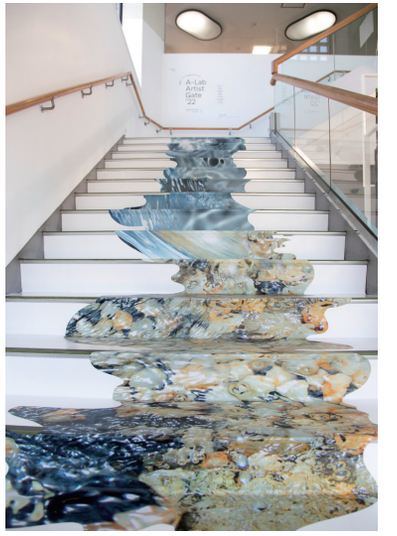
[O.A. -ON AIR-]
インクジェットプリント、841×594mm（2021）

- statement -

誰の記憶にも残らないものに対して感覚的にレンズを向け、対象物とそれを取り巻く環境に目を向けられるのではないかと誘発しています。人がどれほど周囲のものを見落としているのかということについて考え、制作しました。







[綾]
カッティングシート、全長約11m19cm（2022）

- statement -

水をテーマにしたコラージュ作品です。尼崎市に初めて訪れた時に感じた水流の多さや、西九条駅から阪神尼崎駅までの電車内で見た川の水面の煌めきから着想を得ました。

■ 出展作品

## 徳永 葵　Tokunaga Aoi

1999 年生まれ。鹿児島県出身。
京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業。

【近年の主な展覧会･受賞歴】
2022　京都市立芸術大学作品展　市長賞
2022　京都市立芸術大学作品展、京セラ美術館/ 京都市立芸術大学、京都
2022　記憶への代入、myheirloom、東京　など

- statement -

「漫画表現の絵画化」をテーマに漫画から抜け出したかのようなキャラクターとリアルな日常とを融合した作品の制作をおこなっている。紙から切り抜いたキャラクターを紙ごとキャンバスの中に描くことで二次元であることを強調し、異なる平面表現である「漫画」と「絵画」が同時に存在することを目指す。

[集積のなか]
キャンバスに油彩･ペン、100号（1620×1303mm）（2021）

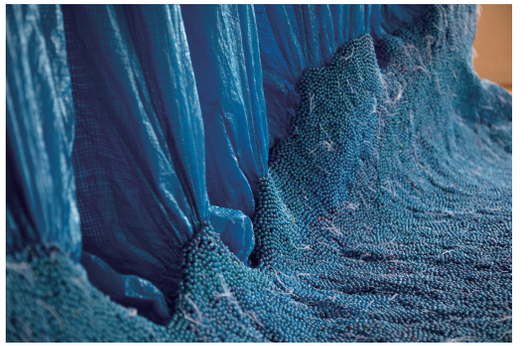
[見ようとしなければ見えない]
キャンバスに油彩･ペン、200号（1940×2590mm）（2022）

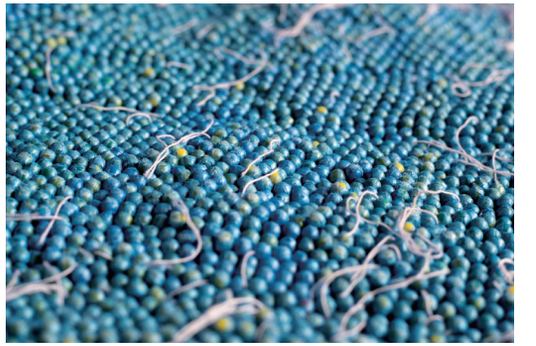
## 長田 綾美　Nagata Ayami

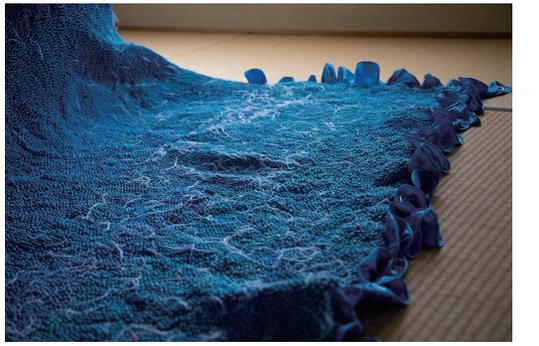
1997 年生まれ。大阪府出身。
京都芸術大学大学院美術工芸領域染織テキスタイル分野修了。

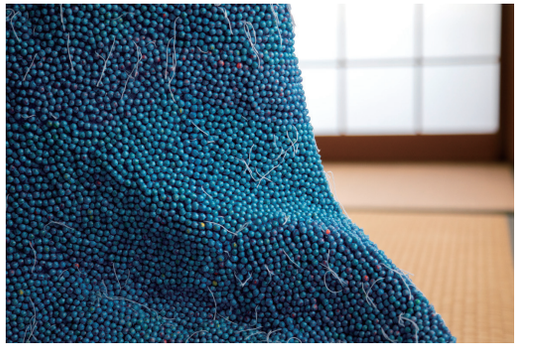
【近年の主な展覧会･受賞歴】
2020　京都芸術大学卒業展　優秀賞、島敦彦特別賞
2021　VOCA展2021 現代美術展望･新しい平面の作家たち、上野の森美術館、東京
2022　KUA ANNUAL2022 in Cm ¦ ゴースト,迷宮,そして多元宇宙、京都芸術大学ギャルリ･オーブ、京都　など

[103,000]
ブルーシート･BB 弾･糸、サイズ可変（2018-2021）









- statement -

日常に見られる素材や、日常の中のさりげない行為に焦点を当て、いつもそれらを手掛かりにして作品制作につなげている。規則的な行為を膨大に繰り返すことから、何気ない日常をリフレームしたい。

■ 出展作品

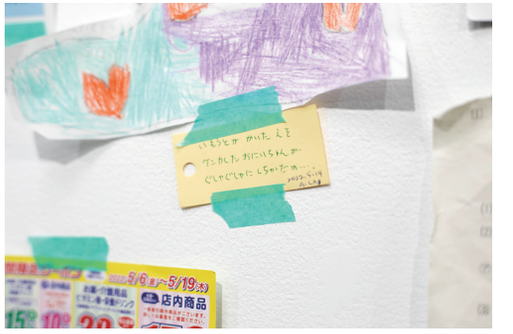
## 前 瑞紀　Mae Mizuki

1997 年生まれ。奈良県出身。
京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻卒業。
京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計修了。

【近年の主な展覧会･受賞歴】
2022　京都市立芸術大学作品展　大学院市長賞
2019　京都精華大学立体造形コース秋展、京都精華大学、京都
2021　そこらへんのあれ、ノランナラン、京都
2022　VIDEO PARTY2022、Lumen gallery、京都　など

[紙屑屋]
いらない紙･単語カード･ペン･板、サイズ可変（2022）

- statement -
A-lab Artist gate' 2022 開催中、A-LABの前や観光案内所などに来られた方が持っていたいらない紙と、その紙についてのエピソードを集めます。カバンの中に、いつのものかわからない紙が見つかることがあり、他の人はどんな紙を持ち歩いているのか気になったことがきっかけで紙屑屋をはじめました。



## 前川琴瑚　Maegawa Kotoko

1998 年生まれ。京都府出身。
京都精華大学芸術学部造形学科版画専攻卒業。

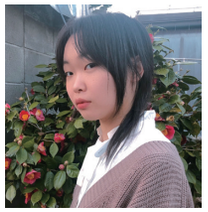
【近年の主な展覧会･受賞歴】
2021　ワコールと美大生による生活をちょっと豊かにするアートコレクション vol.2、大垣書店京都本店イベントスペース「催」、京都
2022　京都精華大学卒業制作展、京都精華大学、京都　など

[もっと距離をとって]
養生カバー、グラシンカップ、布、リボン、サイズ可変（2022）

- statement -

縄張りやテリトリー、パーソナルスペースなど自分が守るためにとりたい距離は掴みどころがなく、その時々で変化し続けるものです。その距離は物理的であると同時に、精神的で「居心地の良い距離を保ちたい」という欲求は自然でどうしようもないもののように思います。この作品では人がもつ距離感をテーマに制作しました。
人は距離をとり、居場所を守るために、物を置いたり、印をつけたり、線を引いたり、仕切りをつけたりと様々な方法を使います。今回はそれらの方法を少しずつ取り入れながら、自分にとっての居心地の良い距離を生み出そうと試みました。

■ 出展作品

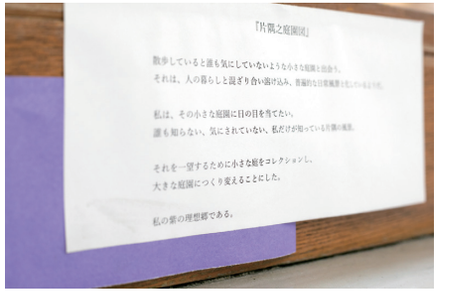


## 宮本 美紗季　Miyamoto Misaki

1999 年生まれ。福井県出身。
京都精華大学芸術学部造形学科日本画専攻卒業。

【近年の主な展覧会･受賞歴】
2021　第28 回　飛騨高山臥龍桜日本画大賞展　入選
2022　三人展- 憧憬の眼差し-、アートギャラリー北野、京都
2022　日本画と恐竜展、中上邸磯崎ホール、福井　など

[内から外へ、外から内へ]
【心緒のリズム】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具、F50号(910×1167mm) (2021)
【やわい始まり】高知麻紙･墨･胡粉･水干絵具･岩絵具、F150号(1818×2273mm) (2021)
【青空の下のものたち-秋の庭-】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具･パステル、F150号変形 (1818×2728mm) (2022)
【うつろう香り】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具･パステル･銀箔、F100号(1303×1620mm) (2022)
【傷心花】高知麻紙･墨･胡粉･水干絵具･岩絵具、F10号(455×530mm) (2021)
【片隅之庭園図(3/5 の作品)】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具･パステル、F50号(909×1167mm) (2022)
【片隅之庭園図(4/5 の作品)】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具･パステル、三六判(909×1818mm) (2022)
【片隅之庭園図(5/5 の作品)】高知麻紙･胡粉･水干絵具･岩絵具･パステル、三六判(909×1818mm) (2022)



- statement -

植物とヒトの暮らしが混ざり合う風景「庭」を描く。庭が人にどう作用するか。人が庭に何を見るか。
景観や建築のような外面的なものなのか。それとも、心を安堵させる内面的なものなのか。
室内⇄窓⇄庭という空間の流れ、空間の連続性の中で、自身が体験したことを元に、内と外の曖昧な関係やそこから見えた自身の世界を空間に展開する。

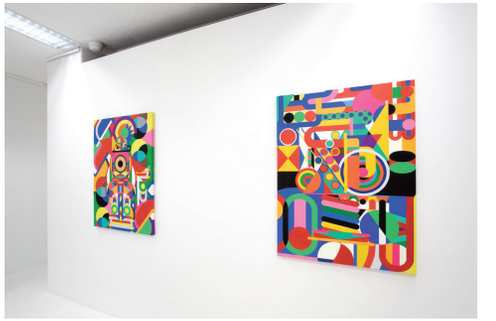
■ 出展作品

## 山口 和真　Yamaguchi Kazuma

1999 年生まれ。大阪府出身。
京都精華大学ビジュアルデザイン学科グラフィックデザインコース卒業。

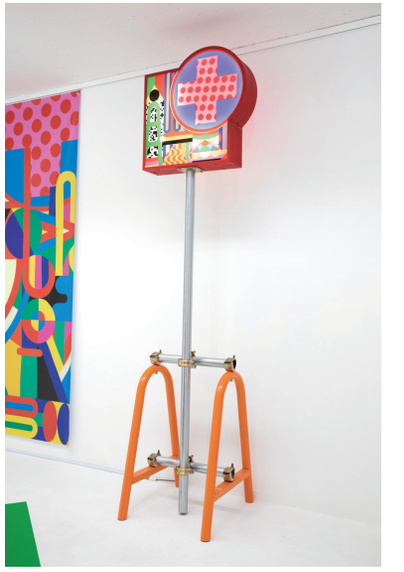
【近年の主な展覧会･受賞歴】
2020　99s、kara-S、京都
2022　SHAPE OF US、BnA Alter Museum、FabCafeKyoto、京都　など

[オワラナイアソビ]
木材、スプレー、LEDテープ、単管パイプ、アクリル、キャンバス、ターポリン、看板、バリケード、アルミ複合版、カラーコーン、サイズ可変 (2021-2022)



- statement -

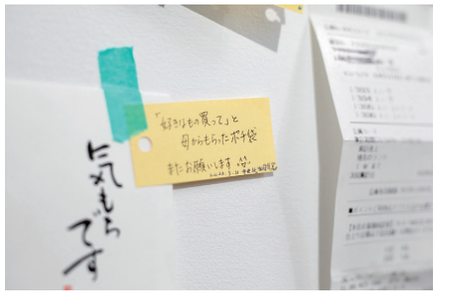
ずっと遊んでいたいという想いを誰もが持っているはずなのに、人々はそれを隠しながら生きている。急速に変化する時代の中で、身の回りの風景は段々と曖昧になっていく。その中に潜む造形に触れてみると、今まで気づかなかった奇妙で面白い形を見つけられる。そこで発見した図形を自由につなげていくと、見たことのない輪郭が現れる。こうして生まれた作品たちを「オワラナイアソビ」と題してグラフィックアートとして表現した。

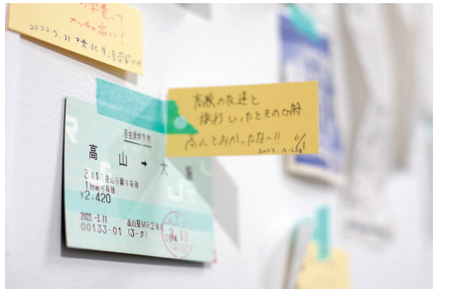


A-LAB Workshop

# 紙屑屋

前瑞紀さんが各会場にて「紙屑屋」を開きました。
いらない紙をいただき、その紙についてのエピソードを伺います。
いただいた紙はエピソードを書いたカードとともに作品として展示されました。





【開催日時・場所】
・A-LAB 駐車場 (10 時～ 18 時 )
5 月 14 日、15 日、22 日、29 日、6 月 12 日、18 日 (10 時～ 13 時 )、19 日、26 日、7 月 3 日
・あまがさき観光案内所 (9 時～ 17 時 )
5 月 21 日、28 日、6 月4日、11 日、25 日、7 月 2 日
・中央北生涯学習プラザ (14 時半～ 18 時 )
5 月 31 日

## A-Lab Artist Talk

出演　コーディネーター：おかけんた（タレント（吉本興業株式会社所属）
アートプランナー、A-LAB アドバイザー）、上続ことみ、徳永葵、長田綾美、
前瑞紀、前川琴瑚、宮本美紗季、山口和真
日時　令和４年６月18日（土）15時～17時
場所　A-LAB ROOM1

トークイベントの様子

### 大学生活・作品について

**おかけんたさん（以下：おか）**：みなさんこんにちは。私、吉本興業で漫才をしています、おかけんたと申します。それでは早速お一人ずつどういった大学生活だったか、そして今回展示している作品に関してのお話を聞いていきたいと思います。まずは上続ことみさんです。よろしくお願いします。どちらの大学でしたか？

**上続ことみさん（以下：上続）**：大阪芸術大学です。

おか：大阪芸術大学。何学部？

上続：芸術学部の写真学科を卒業しました。

おか：大体何人ぐらいいらっしゃるんですか？

上続：毎年増えているらしいですけど、私たちの学年は45人ぐらいいました。

おか：写真学科は多い方ですか？

上続：他と比べると少ないんじゃないかと思います。

おか：それでは画像を持ってきて頂いているので、見ながらお話していきたいと思います。

上続：大学の構内の写真です。大阪芸大はとにかく変わった人が多いという印象があります。

おか：変わった人が多い？

上続：右端に写っているカップルですが、私が観察していた10分の間、ずっとこの状態でした。私がここを通る前からもずっとこの状態だったので、何分この状態だったのかなという。

おか：あまり知らない方ですか？

上続：全然知らないです。

おか：男性が目を瞑っているように見えますね。

上続：なんかちょっと放心状態というか。

おか：放心状態。面白い写真ですよね。

上続：他にも空手の正拳突きをずっとやっている人とかもいます。

おか：大学で？

上続：大学の芝生の上とかでずっと。



おか：写真を撮っているから、そういう面白いシーンとかに興味がある？

上続：そうですね、大阪芸大は歩いているだけで、面白い人が多いのでずっと見ちゃうんですよね。休憩中とか。

おか：その光景を写真に収めたいという意識になってくるんですか？

上続：はい。

おか：この写真は、この２人のアップではなくて、全体の写真を撮っていますよね。何か意味があるんですか？

上続：この２人だけを撮るのもいいんですけど、やっぱりそれを全く気にしていない周りの人たちも面白いので。それを含めて大阪芸大だな。と思いますね。

おか：なるほど。確かに近くに人もいますけど全く見もしていないですもんね。不思議。面白い大学ですね。 ２枚目を見せていただいてもいいですか？

上続：これは私の研究室の中の写真で、今制作している作品を撮ったものです。大学院の研究室は大判印刷といって大きな写真が印刷できるプリンターがあるんですけど、それが無料で使用することができて、いくらでも印刷できるというメリットがあります。

おか：この写真の作品はどれぐらいの大きさですか？

上続：これ１枚で長さが 1m60cm ですね。

おか：そんなにもあるんですか。これは実際作品になったんですか？

上続：まだなっていないですね。制作途中という感じです。写真なので、とりあえず印刷して手元に出して眺めて、そこからどういう風に進めていくのか決めていきます。とにかく印刷という感じですね。。

おか：なるほど。次の画像は大学ですか？

上続：大学です。

おか：海外じゃないんですか？

上続：これは今年の春ぐらいに建てられました。キャラクター造形という学科があって。あまり詳しくは分からないんですけど、フィギュアとかキャラクターの模型とかを造るみたいです。

おか：そう言われるとそういう二次元の世界観を感じます。雰囲気は旅行の一枚という感じですね。

上続：そうですね。

おか：でも羨ましいですよね、こんなに綺麗だと。

上続：そうですね、よかったです。

おか：良いところですね。大阪芸大のイメージも少し変わりました。今こんな感じになっているんですね。大学生活はいかがでしたか？

上続：楽しかったですね。芸術大学という場所で、確かに変わった人は多かったですけど、悪い人というか荒れた変わった人というのはそこまでいなくて。みんなそれ

ぞれ自由にやりたいことをやっている感じがすごく伝わってきた４年間で、それがすごく私としては楽しかったなと思います。

おか：今回どういった作品を展示されていますか？

上続：階段の横のフロアで展示している作品が大学の卒業制作の作品です。最初に展示する場所を決めた時に開けた空間だったので。「卒業制作の展示でしていないことをしたい。」と思ってこういう感じになりました。

おか：表と裏に写真があるんですよね。裏はカラーコーンが見えていて表が自動販売機だったり。これは同じ場所だから表裏にしているのか、全く違う場所？

上続：全く違う場所ですね。カラーコーンは、階段を上がっていく時に奥の人の足の形とリンクするような感じで見せたかったので、その写真を選びました。

おか：この階段の写真は水ですか？

上続：写真自体は池とか湖の水の写真です。今回初めて尼崎に来たのですが、来るまでの道中、尼崎駅の近くには噴水とか大きい川がありました。

おか：ありますね。

上続：水が多いというイメージを感じたので新しく制作した新作です。

おか：考えたらそうですね。駅から A-LAB まで川があったりとか噴水があったりとか。それがこういう形の作品になっていったということですか？

上続：そうですね。

おか：凄いなぁ。階段に展示することで水が流れているイメージも感じますが、そういうことも意識しているんですか？

上続：そうですね、流れるイメージを。

おか：今回階段の窓際にも作品があるじゃないですか。

面白かったです。自転車が斜めになっている。これは撤去された自転車ですか？

上続：これは、撮影場所がごみ収集所というか、いろんなゴミが集まるところで撮ったものです。撤去され廃棄された自転車を撮影したものです。

おか：この何気ないものがすごく印象に残るんですよね。何ですかね？この写真の力というのは。

上続：何でしょう？

おか：どういった想いが自分の中に湧いてきてシャッターを切るんですか？

上続：やっぱりモノに対しての自分の興味がまず一番にあってカメラを向けます。そこからこの作品のテーマの元になっているものが、「普段自分たちが生活している中にある水とか机とか普通のものを写真にしたらどういう変化が起きるのか。」ということから始まっています。その考えが根底にあってこういう作品になっているのかなと思います。

おか：その普段の何気ない風景を、例えば角度であるとか引いたり近づいたりとか、写真というのはそれによってダイナミックに見えたりとかフラットに見えたりとかいろんな見え方ができますよね？そういう面白さみたいなものをこの作品の中に表現したいという部分もあるということでしょうか？

上続：そうですね。

おか：この自転車が、今日の夢にも出てくるんじゃないかと思うぐらいに、非常に印象的な写真でした。今回写真を扱ったインスタレーションという形で展示をしていますが、これまで経験はあるんですか？

上続：初めてです。なので成功しているとかしていないではなくて、自分が思っている通りにはなったな。とは思っています。

おか：成功というよりどっちかといったら成長ですよね。自分で展示しながらインスタレーションを体験したという。非常に楽しみました。ありがとうございました。続いては、徳永さんです。よろしくお願いします。どちらの大学ですか？

**徳永葵さん（以下：徳永）**：京都市立芸術大学の学部を卒業して、今はそのまま大学院にいます。



おか：この写真は何でしょうか？

徳永：これは学部の時の自分の制作室の写真です。部屋を４、５人で共有しています。

おか：大学で制作する時というのは、１つのスペースの中で何人かがアトリエを共有しているような形で制作しているということですか？

徳永：そうですね。学年もバラバラで、２回生から４回生までみんな混じってその制作室を分けて使っているという感じです。

おか：先輩と後輩の関係があるから、やっぱりルールのようなものはあるんですか？

徳永：そういうのは全然ないですね。

おか：学年が下とか上とか関係なく？

徳永：ないですね。喋りながら和気藹々という感じです。

おか：後ろに写っているのが作品ですよね？

徳永：そうですね。

おか：結構大きいですよね。

徳永：学部の卒業制作をしている時期が大きい作品をいっぱい描いている時期でした。

おか：展示している作品もかなりでかいですね。

徳永：これが 200 号です。

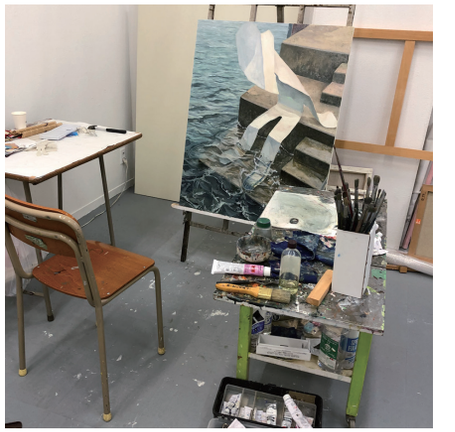
おか：200 号って家に持って帰れないのでは？

徳永：そうなんです。大学院卒業したらどうしようかなと思っています。

おか：みなさん大きな作品とか制作したら、だんだんスペースがなくなってくるんじゃないですか？

徳永：私の隣で、友達も 200 号ぐらいの作品を作っていたんですが、壁がぎちぎちになっていました。

おか：続いての写真をお願いできますでしょうか？



徳永：これは大学院になってからの制作場所の写真です。

おか：狭くなっていませんか？

徳永：ちょっと狭くなったんですよね。部屋割りの丁度 L 字の角の場所を使うことになって、ちょっと小さくなっちゃったという。

おか：そうなると作品も小さくなるんですか？

徳永：そういうわけではないです。大きい作品を描くと言えば、周りの友達とかと協力して制作場所を作ると思います。

おか：学部と比べると院の方が専門的になるんですか？

徳永：そうですね、追求していく感じですね。

おか：なるほど。次の画像をお願いできますか？

徳永：これが学部の時の制作室の友達とみんなで知育菓子でピザパーティーをしていたときの写真です。学校が閉まるギリギリまで連日作業をしていたらみんな疲れてきちゃって。「知育菓子で知育されよう。」となって、友達の作品の段ボールを下に引いてみんなでピザをこねて食べました。

おか：こういうこともしているんですね。

徳永：そうですね。結構仲良くしています。

おか：あの小さいグリーンの容器はなんですか？

徳永：あれはメロンソーダでした。ちゃんと炭酸でしゅわしゅわしていました。

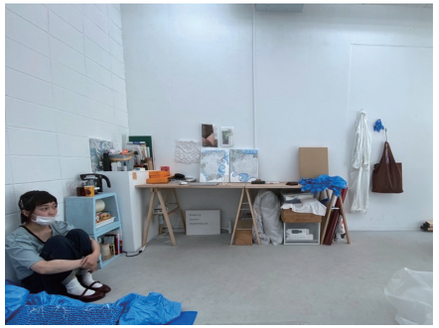
おか：お腹は膨れませんよね？

徳永：一瞬でしたけどピザがめっちゃピザの味しました。

おか：一度買って食べてみたいですね。和気藹々としている感じですよね。
徳永：そうですね、人数自体がそんなに多くないので。
おか：大学を一言で言うならどんなところですか？
徳永：ひっそり。という感じです。ひっそり友達同士で和気藹々としているという雰囲気の学校です。
おか：ありがとうございます。続いては作品についてです。こちらはどういった作品でしょうか？
徳永：もともと漫画を３回生ぐらいまで描いていました。漫画を描いていた理由というのが、コロナで大学に行けない期間があって、家で油絵を描くのも匂いとか汚れたりするからという理由で漫画を描いていました。４回生になって大学に入れるようになってやっぱり油絵を描きたいな。という風になった時に「漫画と油絵を合わせたい。」というのが大きなテーマになっていて。左の作品が漫画と油絵を合わせよう。と最初に試みた絵です。
おか：これは丁度部屋の中に女の子が実際にひょっこり座っているような感じですか？
徳永：そうですね。
おか：この部屋はどなたの部屋ですか？
徳永：自分の実家の部屋です。

おか：ここにいつも座っているんですか？
徳永：そうですね。
おか：それを漫画化したという感じですか？
徳永：最初油絵で漫画を描こうと思った時に、漫画は紙にインクで印刷されているから凹凸とかがないじゃないですか。けど油絵の具というのは逆に絵の具のぼこぼこだったりというのがあって、漫画の平坦さというのが消えちゃったんですね。漫画を油絵で描くということにあまりしっくりこなくて。
おか：漫画はフラットですよね。
徳永：そのフラットなものをフラットなまま画面に入れて油絵にできないかと、紙を紙ごと入れちゃうことで絵の表面上は凸凹があるんですけど、絵の画面の中としては紙の平坦なままの物として女の子がいてくれると考えて、紙の女の子を画面の中に入れ始めました。
おか：漫画は、唯一日本で文脈が喋れるものである。とかよく言ったりしますけども、漫画を昔から読んでいてこれを思いついたというわけではないですか？
徳永：そうですね。漫画は好きでずっと読んでいたんですけど、実際に自分で描く中で、油絵を描くときと漫画を描くときの感覚の違いですね。
おか：最初は抵抗みたいなものは何かありましたか？
徳永：最初はその凸凹になる油絵を描くことはしないでいようと思って、紙を大きく繋ぎ合わせてそこにペンで描いていくという形だったんですけど、大きい紙で描かれたものを見た時に油絵にしたいと思いました。
おか：絵の中に漫画を閉じ込めたようなこの世界観が面白いですよね。でもなんでこんなにごちゃごちゃしたところばかりなんですか？先ほどの写真の中には階段に座っている作品もありましたが。
徳永：今までは、油絵で何を描こうかなというのがふわっとしていて、風景画をよく描いていたんです。その部分はターニングポイントになりますね。
おか：ではその部分は、後ほど聞かせていただきたいと思います。ありがとうございました。長田綾美さん、よろしくお願いします。大学はどちらですか？
**長田綾美さん（以下：長田）**：私は京都芸術大学の美術工芸領域の染織テキスタイル分野で、大学院をこの春卒業しました。
おか：どういった大学なのでしょうか？
長田：私は大学院の時のアトリエの様子を用意しました。他の大学の方がどうか分からないですけど、私がいた棟を使っている人達は個室で制作をしていました。

おか：個室 !? さっき先輩も後輩も合わせて４人で使っているという話もありましたが。
長田：そういう教室ももちろんありますが、私は制作の内容的に１人になりたいという希望があったので、個室を希望して使わせていただいていました。
おか：希望は聞いてくれるんですね。
長田：一応希望は聞いてくれます。人数とかにもよると思うんですけど。
おか：２枚目をどうぞ。
長田：この個室をいただいて一番最初です。荷物を入れだしたぐらいの写真で、まだ荷物が少ないですけど。
おか：広くないですか？
長田：広いですね。本当は２人で使用する部屋でしたが私の代は人数が少ないということもあって運良く１人で使わせていただきました。
おか：これは個室と言いながら、色んな人が入って来たりとかするんですか？



長田：先生とかは全然入ってきます。
おか：気になりませんか？
長田：私は入口に仮設壁みたいものを建てて、外から中が見えないようにしている時期もありました。
おか：それで集中して作業ができたということですね。
長田:そうですね。大学のこの部屋がもう家のようになっていましたね。ブルーシートの上に大きいクッションを置いて寝たりしていました。基本的に朝８時から夜の10時ぐらいまで大学に入ることができて、その時間ずっと居たんです。
おか：授業は毎日あるというわけではないんですか？
長田：大学院に入ったら毎日ではないですね。制作がメインです。２年間のうち１年生の時には必要な単位は結構取れます。なので２年生の時はひたすら制作です。だからとにかくこの部屋にこもって制作していたので、生活できる一通りのものは全部揃っていました。
おか：一通りのもの？
長田：ご飯とか。ケトルでお湯を沸かして、お茶を淹れたりとか。ラーメン食べたりとか。
おか：もう家じゃないですか。
長田：そうですね。寒かったら毛布もあるし、上着とかもあるから、ここで生活できましたね。
おか：家が２つあるようなものですね。
長田：そうなんです。夜帰る時とか、翌朝すぐ来るわけじゃないですか。だから全部荷物を置いて行って、携帯と財布だけ持って帰る。とか結構ありました。

おか：学生生活そのものですね。そんな長田さんがどんな作品をお作りになったのか。作品は和室に？
長田：はい、和室に展示しています。
おか：入った時にブルーの色が凄く目に焼き付いて、綺麗だったんですけど、丸いビーズみたいなものがありますが、あれは何ですか？
長田：これはブルーシートにエアガンの弾を絞っています。
おか：エアガンの弾なんですね。ブルーになっていますけど、この色は？
長田：染織の「絞り」という技法をご存知でしょうか？ちょうど「豆絞り」のような技法です。エアガンの弾をブルーシートで包んで、上から糸で縛る作業を何度も繰り返した作品です。ブルーシートが薄いので、たまにBB 弾自体の色が透けて見えていたりします。
おか：これはどういったことをお伝えしようと思ったのですか？
長田：私は、染織に所属しているのですが、最初は布をデザインしていました。段々ただ美しい布を作ったりすることに抵抗、疑問を感じて楽しくなくなったんです。
おか：なるほど。
長田：何気なくブルーシートを見たときに、縦糸と横糸が交差している部分が見えたんです。その時にこれも布だと思いました。絞りは経験のある技法だったのでブルーシートを絞ってみようと作りだした作品です。
おか：ブルーシートを縦糸と横糸で見たことなかったですね。絞ってみてどうでしたか？
長田：ブルーシートって大切にされるものではないじゃないですか。いわゆる消耗品で、古くなったら新しいものに買い替えますよね。でも「絞り」は、染織の技法の中でも時間と手間がかかる技法です。大切にされないブルーシートにものすごく執着してみよう。というところから始まっています。完成系というのは全く考えずに、ただ正方形のブルーシートを端からどんどん絞ってできた作品です。糸が表面にいっぱい出ていますが、この糸も絞りをやっている過程で出るもので、私の手加減によってちぎれます。それは作業の跡として全部残しているので、全体を見渡してもらいたいという思いがあります。私が調子のいい時は糸が少なかったり、調子が悪い時はいっぱいちぎれて跡が残っていたりします。

おか：身体性までもこの中に見えるということですか？
長田：私のメンタルも表れていますね。
おか：見る人によっていろいろなものに見えると思います。泡のようだったり、波の飛沫みたいに見えたりもしますね。空とか海に見えたり湖に見えたりとか。
長田：生き物に見えるとおっしゃる方もいました。
おか：なんでブルーシート？と思う方もいらっしゃると思いますが、それがさっきお聞きしたところですね。
長田：そうですね。ブルーシートって私は凄く綺麗だと思うのですが、どうしてもネガティブなイメージがつきまとう素材だと思います。災害を想起したり、ホームレスの方のお家の素材であったりとか。ネガティブなものだけど、じゃあ「モノの価値とはなんだろう？」と。ブルーシートの価値を覆したいわけじゃないですけど、見方を変えるきっかけをつくりたいと思って制作しました。
おか：見え方が少し変わりました。今までブルーシートで絞りをやった人も見たことなかったですし、非常に綺麗です。ありがとうございました。前さんお願いします。前さんはどこの大学ですか？
**前瑞紀さん ( 以下：前 )**：京都市立芸術大学の構想設計専攻です。
おか：徳永さんと同じ大学ではありますが、また違う見え方がすると思います。これは？
前：大学の移転先の工事現場です。
おか：このクレーンを撮ったというのは何か意味が？
前：工事現場が好きです。工事現場はめっちゃ面白くて。ときどき写真を撮っています。

おか：ミキサー車とかいろいろ種類がありますよね。何系が好きですか？
前：道路工事の地面を掘っているときが好きです。
おか：見るのが好きなんですか？
前：人がドリルで掘っているところが好きです。あと、大体夜に作業すると思うんですけど、朝になったらめっちゃ綺麗になっていたりしますよね。それがすごいなと。
おか：次の写真をお願いします。これは？
前：これは構想設計の学生たちで、私が作った落とし穴の片付けを手伝ってくれているときの写真です。
おか：これが落とし穴ですか？上にあるのが蓋？
前：雪が降ってきて穴が空いてしまって。かけられなくて失敗しちゃったんですけど。
おか：雪が降ってきて穴が空いた？
前：はい。失敗したので片付けていました。
おか：構想設計を勉強していたんですよね？その中に落とし穴というのがあるんですか？
前：ないです。自分でやりたい事をやっていいので。
おか：それで落とし穴を作ってみようと？

前：はい。
おか：でも失敗した？
前：失敗しました。
おか：それで作るのはやめたんですか？
前：このあと春休みで人が来ることがなかったので断念しました。
おか：大学で落とし穴。面白いですね。次の画像は、アスレチック？何でしょう？
前：これはツリーハウスです。
おか：ツリーハウス？

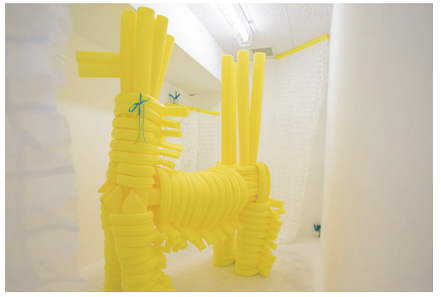
前：これは「土の家」という授業があって。土壁の素材で家を作ったり、ツリーハウス作ったり、大学に半分山みたいなところがあるので、そこに穴を掘ったり。
おか：同じ京都市立芸術大学でも全然違う印象ですね。
前：大学にはいろんな人がいてめっちゃ面白かったです。
おか：それでは今回の展示作品について教えてください。
前：紙を集めています。展覧会期間中に、A-LAB の駐車場とあまがさき観光案内所と中央北生涯学習プラザで通りがかった人に「いらない紙、持っていませんか？」と聞いて、そのいらない紙についてのエピソードを聞いています。
おか：いかがですか？
前：はい。いろんな話が聞けたり、尼崎に来たことがなかったので、おすすめの観光場所とか教えてもらったりしました。
おか：展示されている紙を見ていると、大学の学費を払った領収書が貼ってあって「え、大学ってこんなお金かかんねや。」思って、見てちょっとびっくりしました。

前：すごく高かったですね。
おか：あれ持っておかないとダメなんじゃないですか？
前：どうなんでしょう？貰っちゃいました。
おか：他にも小学生ですかね。テスト用紙があったりもしましたね。あれは子供さんがくれたものですか？
前：お父さんと一緒に来てくれました。テスト用紙の裏側に絵を描いたりするのが好きみたいで、それを持ってきてくださいました。
おか：なるほど。コンビニのレシートとか、いろんなものがありますよね。音符が書いている楽譜みたいな紙とか。ちなみにワークショップは今日まで何回ぐらいやったんですか？
前：合わせて大体 11 回ぐらいですね。
おか：どんどん溜まってくるわけですよね。これからも。
前：そうだと思います。
おか：折り紙もどんどん上手になっていますね。
前：来た子供さんとか、案内所のスタッフさんが折り紙が得意で、毎週教えてくださって。
おか：作品的にはコミュニケーションがテーマですか？
前：そうかもですね。
おか：僕はこれを見ていると、人となりみたいなものが見えてくるから、すごい面白かったですね。紙から人を想像するような。
前：ありがとうございます。
おか：こういったこと初めてですか？
前：いえ、前回は京都駅でやっていました。
おか：やっぱり違いますか？尼崎と京都駅は？
前：はい、違いました。
おか：興味ありますね。京都駅はどんな感じでしたか？
前：京都駅は、ほとんど観光で通る方が多かったです。
おか：地元の人間が少なかった？
前：少なかったです。
おか：じゃあ貰うものはどんな紙を貰ったんですか？
前：水族館に行ったレシートとか、修学旅行生が来てくれてお土産買ったレシートとかがありました。
おか：尼崎はどうでした？
前：尼崎は地元の方が多くて。A-LAB が住宅地にあるので子供さんとかが通りがかって、声をかけてくれたり、だんだん挨拶してくれる人が増えたりしました。
おか:それを京都と尼崎でやって、自分としてはどういったものを感じましたか？
前：場所によって人の雰囲気とかが違うのが面白いな。というのと、京都駅も面白かったですけど、尼崎の駅前がめっちゃ面白いなと思いました。
おか：駅前が？
前：はい。
おか：それは作りが面白いってことですか？
前：居る人が面白かったです。
おか：地元の人が多いですからね。また違う場所に行ったら面白いかもしれないですね。奈良とか神戸とか。
前：そうですね。おすすめはありますか？
おか：昔、タバコのキャンペーンでタバコの携帯灰皿を配るというのがあったんです。大阪駅、京橋駅、天王寺駅、この３つを周りました。大阪駅では、遠目でみんな見てるんですよ。「皆さんどうぞ。こちら来てください。タバコのポイ捨てはあかんから、この中に吸い殻は入れてくださいね。」と言ったら「いただけるんですか？」と言うから「どうぞ、持って帰ってください。」というのが大阪駅。次に京橋に行ったんです。「何やってんの？」と言って。「タバコの灰皿のキャンペーンをやっていて、これを配ってるんです。」「ほな、ちょうだい。」というのが京橋。天王寺は「この灰皿…」でウワァって寄って来て、あっという間になくなったんですよ。だから天王寺は面白いと思いますよ。それだけ大阪は環状線で違うんですよ。
前：環状線、面白そうですね。行ってみます。
おか：ありがとうございました。それでは前川さんよろしくお願いします。大学はどちらでしたか？
**前川琴瑚さん ( 以下：前川 )**：大学は京都精華大学の版画専攻です。
おか：この写真は？
前川：京都精華大学の流渓館という、大学の先生方が研究室として使っている施設の写真です。
おか：なぜこの写真を撮ったんですか？
前川:大学といえばここかなと。ここの石碑に「自由自治」と書いてあって、精華大学を象徴する言葉じゃないかなと思いました。
おか：やっぱり通っていてそう思いましたか？
前川：そうですね。放任主義なところが。
おか：私も３年間行かせていただきましたけど、最初は京都精華大学さんって堅いんかな？と思ったら、意外と自由というか。
前川：そんな感じですね。次が版画の自分の机です。

おかけんたさん

おか：これもアトリエというか机があるわけですか？
前川：そうですね。
おか：手前の紙は版画を刷るときの紙ですか？
前川：そうですね。試しで刷ったりする時の紙です。
おか：ここは何人ぐらいで使っているんですか？
前川：後ろの方にも席がいっぱいあったりするので、人数は分からないですね。
おか：人がいて集中はできますか？
前川：あまり集中はできないですね。
おか：そこも自由ですか？
前川：そうです。
おか：続いての画像お願いします。
前川：同じ部屋ですね。
おか：手前にあるのはプレスする機械ですか？
前川：圧を加えて印刷するための機械で、リトグラフという種類の版種を刷るときに主に使われています。
おか：これは自由に使えるんですか？
前川：そうですね。空いていれば。

おか：広くていいですね。皆さんで使えるし。どうして版画を選んだんですか？
前川：版画の技法が面白そうだなと思って入りました。
おか：実際どうでしたか？やってみて。
前川：難しかったですね。
おか：版画にはいろんな種類があるじゃないですか？リトグラフ、シルクスクリーンだったりエッチング、ドライポイントがあったりとか。今回の作品にどのように繋がっているかというのが非常に興味があります。
展示場所は倉庫という場所ですよね？
前川：はい、そうです。
おか：中に入ると階段にカーテン？がありますね。
前川：グラシンカップで作った布のようなものが吊り下げられています。
おか:その中には、不思議だったんですが、木馬ですか？
前川：この形は工芸品の「忍び駒」という藁で作った馬の人形の作り方に近いと思います。
おか：なぜこういった作品を？
前川：卒業制作の作品を見てお声がけいただいたんですけど、卒業制作の作品を家で保管するにあたってスペースが足りなくて、結構な量を捨ててしまっていました。なので新しく作品を作らなくてはならないということでこれを作ったという経緯があります。
おか：版画を勉強して、何でこうなるのか、ものすごく興味があります。後ほどお聞かせください。ありがとうございました。前川さんでした。宮本さんお願いします。宮本さんも同じく京都精華大学ですね。
**宮本美紗季さん（以下：宮本）**：京都精華大学の日本画コースを卒業しました。



おか：日本画コースということで。卒業制作の展示を見に行きましたけど。日本画という日本画がたくさんあったんですけど。宮本さんの作品も面白かったです。こちらが大学ですか？

宮本：ここが私が日本画を制作していた５号館の建物です。特徴としてはこのピンク色の壁です。それが日本画の制作場所のトレードマークみたいになっています。あとこの玄関のあたりで植物を育てています。
おか：階段の左のところですか？
宮本：そうです。
おか：誰が育てているんですか？
宮本：これは学生がそれぞれ持ち寄って育てているものもあったり、先生たちと生徒が一緒になって植物を育てる授業とかもします。
おか：面白いですね。
宮本：京都精華大学自体が山の中にあるので、自然が周りにあります。
おか：続いては、制作しているところですね。
宮本：これは私の制作しているスペースです。
おか：今回展示している作品もありますね。
宮本：そうですね。今展示しているのは２枚とか３枚ですけど、もともとこれは５枚くらいを繋げていました。１枚で畳１畳分くらいの大きさのものです。
おか：大きいですね。
宮本：そうですね。横に５枚くらい繋がっているので、

大体８メートルくらいのものを卒業制作の展示の時に屋外で展示していました。その卒業制作を描いている時の写真です。
おか:次の写真もいいですか？綺麗ですね。作品のモチーフですか？
宮本：そうです。これは学部生の子達と一緒に育てたチューリップとか野菜とかお花です。それが５号館の裏に大きい庭があって、そこの景色がずっと繋がっている、そんなイメージです。
おか：何でこれを描こうと思ったんですか？
宮本：ちょっと実家と似ているような雰囲気を感じたので、いいなと思いました。
おか：ご実家もこんな感じですか？
宮本：はい。実家の庭にお花が咲いているのもそうですけど、周りのご近所さんのお家のお庭もすごく素敵で。それを見るのが本当に好きなんです。
おか：なるほど。こういうお花に囲まれる生活をしていたから自然とこういう作品になっていった？
宮本:そうですね。あそこにある作品はこの写真をスケッチして作品にしました。

おか：なるほど、面白いです。続けて作品のことについてお話ししていただけますか？
宮本：空間を使った展示をさせていただいています。疑問が元々あって、「絵ってなんで壁に飾らないといけないんだろう？」ということを思っていました。それから「絵ってなんで室内にあるんだろう？外に出してもいいんじゃないか？」と思っていたので、卒業制作のとき、絵を壁から離して展示してみようと思いました。
おか：やってみてどうでした？
宮本：そうですね、失敗とか完成度とかよりも「楽しい」が勝ちました。
おか：平面作品のインスタレーション的なイメージが強いですが、壁にかけるという概念をぶち壊したいという方が強いですか？
宮本：そうですね。制作のコンセプト的にもさきほどのお話にもありましたが実家から始まっています。コロナ禍の中で家の中にずっとこもっていました。真っ暗の部屋の中で YouTube とか見たりしながら過ごしていました。でも窓から光が差しているところを見て、ふとその窓を見た時に、「自分は閉じた中にいる。」と思っていたんですけど、意外と世界と繋がっているというか。窓があるおかげで「世界に私は今いる。」というか。そう感じさせてくれました。その経験があって、「室内から窓」、「窓から庭」という空間の流れを今回展示しました。
おか：日本画といえばオーソドックスは、絵を描いて壁にかけるというのが通常ですけど、そういうところとは全く違いますね。日本画だからこうなったということでもないのですか？
宮本：そうですね。「日本画」というものに縛られるの

もすごく嫌で。絵の中だけで作品を終わらせたくなくて、ちょっとはみ出したいというか。なので、ちょっとした立体物もあったり、作品の裏側にテキストを載せたりもしています。

おか：そうですよね。彼女の卒業制作の展示を観に行ったときも、宝探しのようでした。「この内容は違うところに書いています。探してください。」とか書いてあって、探したりしました。今回はどうですか？

宮本：卒展の時よりも深く納得のいくようなものになったと思います。

おか：でも屋外の作品は雨風に打たれていて心配ですね。

宮本：雨風に打たれていますね。でも卒展の時は雪が積もって、それも良い景色になっていました。

おか：こういった発想というのはなかなか面白いなと感じます。ありがとうございました。最後は山口さんです。大学はどちらでしたか？

**山口和真さん（以下：山口）**：京都精華大学です。

おか：これはアトリエですか？

山口：そうです。大学２年生の時に使っていた教室です。

おか：ごちゃごちゃしていますね。

山口：ごちゃごちゃしています。特に自分たちの代はすごく汚かったですね。先輩とか後輩はすごい教室をきれいに使っているんですけど、どうしても自分たちの教室は片付かなくて。

次の写真は３、４年の時に使っていた教室です。右上に見える白いカーテンから右側が３年生の教室で、正面に見えている方が４年生の教室です。

おか：学科は何でしたか？

山口：グラフィックデザインコースです。

おか：物差しも写っていますが、あんなに長いものも使うんですか？

山口：そうですね。大判プリントで印刷した時とかに余分な部分を切り落としたりする時に使用します。

おか：次の写真が作品ですね。これはどこですか？

山口：これは学科内にある撮影スタジオです。卒業制作の時に作品が大きすぎて教室で作業するのが申し訳なくなって。スタジオをお借りして制作していました。

おか：私も卒展見に行った時に、体育館の正面にこの作品がありました。否応なしに絶対に目に入るので頭の中にインプットされますよね。実際に今回展示している様子も見せていただけますか？どういった作品でしょうか？よろしくお願いします。

山口：日常に存在するモチーフを構成して、そこで生まれた形をさらにコラージュのようにくっつけています。

おか：手前に写っているのはシーソーですか？

山口：シーソーですね。

おか：穴が空いていて、階段のようなものもありますね。これは何ですか？

山口：これは公園の滑り台をモチーフにしています。もともと原画の展示をしたかったのですが、壁とかに原画を展示すると世界観が壊れるかなと思って、秘密基地と

いうか隠れ家的なところに展示をしたいなと思ってこういう形になりました。

おか：今まで、こういった形の表現というのは卒展以外でもされていましたか？

山口：あまりしていなかったかもしれないですね。立体というのは卒展が初めてです。

おか：やってみてどうでしたか？

山口：平面だけだとあまりボリュームが出なかったので、色でボリュームを出していたんですが、立体が入ってくると刺激的な展示に変わりました。

おか：１つ１つにモチーフがあったりするんですか？

山口：そうですね。この奥の黄色い物は工事現場にある電光掲示板とかをモチーフにして、その中にモーションを組み込んだものになります。

おか：赤いコーンがある作品ですね。真ん中の電光掲示板のようなものは何ですか？

山口：あれはもともと薬局の回転看板で、街を歩いている時にこれを利用したら面白いものが作れそうだな。と思って購入しました。

おか：写真に写っているターポリンの作品は、赤いドットがあったりいろいろな要素がありますね。

山口：要素としては QR コードであったり、緑の部分は工事現場とかにあるバリケードです。そういうところから形を抽出して書き込んでいます。

おか：街にあるものの造形を自分なりに再構築して、グラフィックの形に落とし込んでいるということですか？

山口：そうです。

おか：グラフィックデザインはポスターであったり商業的なものがよくあると思いますが、こういった形の作品を作り出してどうでしたか？

山口：実は大学のゼミは、グラフィックデザインではなく、他のコースのゼミに入らせていただいていました。

おか：どんなところに入っていたんですか？

山口：現代美術作家のやんツーさんのゼミでした。

おか：そうなんですね。やっぱり影響は受けましたか？

山口：そうですね。おすすめの展示とかを教えていただいて、アートに触れる機会が増えたので、すごく刺激をもらっていました。

おか：そういった刺激を受けて、こういった展示となったわけですね。ありがとうございました。

## ターニングポイント

次は「ターニングポイント」をご紹介したいと思います。どういった影響を受けて今の形になったのか。そのターニングポイントによって作品が成立したとか、制作が変わっていったとか。そういうところに次は注目したいと思います。それでは上続さんお願いします。

上続：「HUNGRY」です。

おか：どういうことでしょうか？

上続：これは写真集の名前です。2019 年なので、２年生の時に見つけた写真集で、この写真集が今はもうないアインシュタインスタジオというところから出版されていて、新人作家の写真を集めた写真集です。最後のページに「掲載されたいならメールを送ってください。」と書いていたので、そこにメールを送ったことをきっかけに、どんどんといろんな展覧会に参加できました。

おか：それはその方が「こういうところに展示したらいいよ。」とアドバイスしてくれたってことですか？

上続：そのアインシュタインスタジオの主催する展覧会に参加したりとか、KYOTOGRAPHIE の「KG +」にも参加したりとか。この写真集に触れたことがきっかけ

上続ことみさん

で、なんとなく世界が広がったような気がします。
おか：自分としてはどういう方向に変わっていったと思いますか？いろんなものに興味を持つようになったとか、行動的な部分でいろいろあると思いますが。
上続：自分の作品をコンペティションに出していくんですけど、応募して通るとか落ちるではなくて、そこに集まった私と同じ新人作家の人たちの作品をたくさん見ることができるんです。学外の作家さんの写真を見ることができるのはよかったです。
おか:これを見ていなかったら、もしかしたらまだ広がっていなかったかもしれない？
上続：かもしれないですね。
おか：素晴らしいですね。何気なく読んでいた本から外の世界を知るきっかけが生まれたということですね。続いて徳永さんお願いします。
徳永：「教育実習」です。ただ教育実習自体はそんなに関係がないです。なぜゴミ屋敷の絵を描くようになったか。という話ですが、コロナ禍であまり帰省もダメということになったじゃないですか。地元が鹿児島なので長い間帰られなくて。実家がゴミ屋敷なんですけど、長く帰らなかったから実家がゴミ屋敷なことを忘れていて。教育実習が地元の出身の高校だったんですけど、その時に帰って久しぶりに実家を見たら「こんなだったんだ。」という驚きと「おもしろい。」と思いました。
おか：やっぱり住んでいたから分からなかった？
徳永：そうですね。住んでいる時はそれが他の人から見たら衝撃というか面白いような状況であるということに気づいていなかったんですけど、一回離れて一旦忘れることによって新鮮な気持ちで見れました。
おか：それでこういったモチーフになってきたということですか？

徳永葵さん

徳永：そうですね。あとゴミ屋敷の絵というのは卒業制作で描いてからその後はあまり描いていないんです。その理由の１つとして卒展の会場が京セラ美術館だったんですけど、ピカピカで新しいので、そこにゴミ屋敷の絵があったらおもしろいなという考えがありました。
おか：ここ A-LAB の展示もそういうイメージですか？
徳永：今回は逆に最初に描いた作品と卒業制作を並べて飾りたいなということでこの２つを展示しました。
おか：これがご実家ですか？
徳永：実家で、自分のおばあちゃんを描いています。
おか：周りには写真があったり、ティッシュやタオル、電話もありますね。括られた袋の中はなんでしょう？
徳永：大体服とかが入っています。
おか：この光景を久しぶりの帰省時に見て新鮮に感じたんですね。
徳永：これが現実だな。と思いました。漫画はファンタジーとか空想とかを形にするので。
おか：なるほど。何かつながった気がします。ありがとうございました。続いて長田さんです。ターニングポイントは「染織じゃなくてもいい」。
長田：学部の時の話ですが、1、2 回生の時は基礎を学びます。「染め」と「織」。花をスケッチして、お花のデザインの布を作ったりしていました。素直に布を作ることを楽しんでいたんですね。3 回生になった時にゼミを選択する時期がきまして。私は単に布を作るのがつまらなくなっていた時期だったので、現代美術作家の河野愛さんのゼミを選びました。そのゼミの最終目標が展覧会をすることだったんですが、その展示にはテーマがあって「1 ヶ月の日常の記録を装身具にする。」というテーマでした。私はその当時 3 回生ですけど、学費を稼ぐためにめちゃくちゃアルバイトしていたんですね。土日はもちろん働いて、平日は学校が終わったら帰ってアルバイトするみたいな。月に 20 日ほど「八百屋」でアルバイトしていました。私はその 1 ヶ月の記録を装身具に落とし込む。というテーマの中で、1 ヶ月をその八百屋で働いている 20 日と捉えて、八百屋で働いているということを装身具にしようと思ったんです。何をしたかというと、20 日なので 20 食分。1 日 1 食ずつ自分が働いていた八百屋さんの野菜とか果物とかを煮出して色を抽出して、最終的にマニュキアとか香水とかの空瓶の中にその液体を入れました。私は装身具と聞いたときに、「マニュキアとか香水も身に纏うものだから装身具と言えるのではないか？ということで、そういうものを作りました。当たり前なことですけど、「表現の方法って染織だけじゃないんだ。」ということを身をもって体験した展覧会でした。展覧会をするということが初めてだったし、何もかもが刺激的で。振り返ると、今も布と捉えてブルーシートを扱ったりしているので、そういう柔軟な考えができるようになったきっかけは確実にそこです。
おか：アルバイトが作品に結びつくんですね。
長田：最初はやっぱりその煮出した液で布を染めるとか、やっぱり染織の考え方で作品を作っていて。でもやっぱりそうじゃなくて、違う表現にチャレンジしようと思ってできた作品でした。
おか：それも草花ではなく八百屋さん。ちなみに何が綺麗でしたか？
長田：私が好きだったのは、そら豆ですね。
おか：そら豆は綺麗なグリーンになるんですか？
長田：だと思うじゃないですか。豆の薄皮から色が出るですね。皮からは全く色が出なくて。
おか：そうなんですか。
長田：豆を 1 時間ぐらい煮出すと、薄いピンク色が出ます。そういうのを瓶に入れて展示しました。
おか：それは愛らしくなりますね。
長田：そうなんです。紫キャベツとかすごく色が出そうと思ったら全然出なくて。それも茶色っぽくなったり。
おか：素材というものに対しての固定概念も覆した部分もあるわけですね。

長田綾美さん

長田：そうですね。
おか：そこがターニングポイント。
長田：そうですね。「染織じゃなくていい。」です。
おか：なるほど。ありがとうございました。次は前さんのターニングポイントを教えてください。「介助」？
前：介助のアルバイトをしたのがターニングポイントです。私は話すことがかなり下手で大学でも説明とかが下手で怒られていました。うまく説明できないなと思っていたときにガイドヘルプという、障害のある利用者さんと一緒にお出かけに行くというアルバイトがあって。それに行った時に話せない方もいらして、体調が大丈夫かとか、食事中にどれが食べたいとかを聞いたりするんですけど、全部「うん。」と言っちゃったりすることとかがあったんです。なので表情で 1 番笑っているものが食べたいのかな？とか、そういう言葉以外でのやりとりが増えて、「言葉じゃない方法でやりとりってできるんだ。」と気づいたのがきっかけです。
おか：それは自分が話すことというのがどちらかと言えば不得意な方で、その中で所謂コミュニケーションの取り方というか、「こういう事があるんだな。」というところを自分がここでターニングポイントとして見つけたという事ですか？
前：たくさん教えてもらいました。こんな方法もあるんだ。と思って。それからどんな方法でやりとりをしようかなと思っていらない紙をもらったり、川の清掃を一緒にして拾ったものを教えてもらったり。まだ試せていないこともいろいろあります。
おか：そのいらない紙をもらったり、拾ったりするまでに辿り着くまでに他にもなにかしていたのですか？

前瑞紀さん

前：いらない紙の前は、張り紙をしていました。
おか：張り紙？
前：はい。張り紙の横に白い紙とペンを置いて「この張り紙を見た人はこの張り紙を書き写してください。」と書いて、私はそこにはあまり行かないようにしながら経過観察をしていました。
おか：どちらかというと間接的な形ですね。ツール的な部分ではなく、人間観察的な部分からスタートしたんですね。そこから紙というものに関して興味が湧いてきたということですか？人に書いてもらったり、使っていたものをもらうというスタイルですが。
前：紙をもらおうと思ったのは、自分の鞄の中にいつのものか分からない紙が入っていることがあって、他の人はどんな紙を持っているかな？と興味が湧いたところからですね。
おか：なるほど。確かにありますね。飴の包み紙とか出てきたりしますよね。
前：これを聞いてみたら、人によって違うことを教えてもらえるんじゃないかなと思って。
おか：面白いですね。そこから今回のこの作品になったということですね。ありがとうございました。１人１人、ターニングポイントは違っていて、それが作品につながってできていくのは面白いですね。それでは前川さんお願いします。ターニングポイントは何でしょうか？
前川：ターニングポイントは「アルミ板」です。私は版画専攻に所属していて、リトグラフという手法を使って平面作品を作っていました。材料として使うアルミ板があるんですけど、これを作っている職人の方が事故に遭われてしまい、このアルミ板の仕入れが難しくなったということがありました。その時にリトグラフ以外の版画の手法を知らなくて、版画が作れないんじゃないかという問題が出てきたのですが、その中で版画以外のもの作りって何かな？と考え、版画以外のことを始めるきっかけになりました。
おか：そこから版画に戻ることはなかったんですか？
前川：版画専攻にいると版画の実験をする課題や、版画でやらないといけないことがあったりするので、その時は版画をします。
おか：今の自分のやり方を続けていていかがですか？
前川：版画をやるのか、それともここで展示したようなインスタレーションのような作品にも手を出していくのか、どうしようかなと悩んでいます。
おか：今回の展示で木馬みたいな…という話がありましたが、その説明をしていただけますか？
前川：卒業制作で作ったものが使えない。版画を新しく作るのが難しい。という条件の中、違う素材を探していました。特殊な技能を持っていない人間がなんとか扱える素材は何かなと思った時に、グラシンカップと養生カバーを見つけて、この材料を使って何か作ろうというのが最初のきっかけです。
おか：これまでは版画という平面表現でしたが、今回は立体作品による表現です。何か戸惑いのようなものはありましたか？
前川：やっぱり勝手が違うなというのはありました。多分こういうきっかけがなかったら版画専攻にいながら版画以外のことを始める勇気はでなかったと思います。
おか：チャレンジ精神が生み出した作品ですね。ありがとうございました。
宮本：私のターニングポイントは、「落葉」です。これは作品のタイトルです。昔、全然いつかは覚えていないんですけど、地元の福井の美術館にこの「落葉」という作品が展示されていました。描いた人は「菱田春草」という日本画家です。この作品は森の中が描かれていて、地面に落葉があって、木がたくさん地面から生えている穏やかな空気感の作品です。これは屏風の作品で、美術館に展示されている時も大きな屏風が展示されていました。地元は全然美術が浸透していないというか、触れ合う機会が全くない田舎でした。
おか：美術に関して？
宮本：はい。好きなものといえば漫画とかアニメとか。そういうものしか知りませんでしたが、たまたま行ったその美術館の中でこの作品に触れて、すごい衝撃を受けました。美術に興味を持ったきっかけがこの作品です。
おか：それはいくつくらいの時ですか？
宮本：小学生くらいですかね？
おか：しっかりと頭の中に残っているんですね。
宮本：はい。そこから美術に興味を持ち始めて、日本画を調べるようになりました。手元に全く本がなかったので、「日本画」で画像を検索していましたね。その中で「四季草花図屏風」という屏風がすごく好きになりました。描かれている四季折々の花や、庭みたいな風景があるので、それがすごく描きたくて影響を受けました。
おか：「落葉」から始まったんですね。
宮本：そうですね。他にも実家の窓から見た風景とリンクした部分もあって、その時に「こういうものを描こう。」という気持ちが芽生えました。ずっとリスペクトしている作品です。
おか：素晴らしいですね。作家さんもお喜びになると思います。ありがとうございました。最後は山口さん、お願いします。
山口：「図録」です。
おか：これはどういった図録ですか？
山口：大学３年生の時に友人３人と、卒業される先輩方の卒業制作の図録のデザインを担当させていただいたことがありました。今まで課題などで作品を作っているときにポスターの一部をキラキラさせたいとか、やってみたいことはあったんですけど、なかなか予算的にできないことが多くて諦めていました。この図録は大学からいただいたお仕事だったので贅沢に加工や印刷をさせていただくことができたんです。そこで、自分たちがこれまで課題とかでは諦めていた、今まで出来なかったことをこの図録でできて、最後まで仕上げられた達成感がすごくありました。
おか：大学の授業は達成感というよりも、課題をクリアして次に進んでいくという感じですよね。
山口：そうですね。図録が人の手に渡って、いろんなリアクションもいただいて。逆にパワーを貰いました。
おか：どういった気持ちになりましたか？
山口：手に取ってくれた人がすごく褒めてくださったりとか、自分が作ったものが京都国際マンガミュージアムに置かれていたりもしたのですが、不思議な気持ちになりました。それでもっと頑張らないとなって思いました。
おか：この図録で視野が広がったという感じですか？
山口：そうですね。今まで知らなかった印刷技術とか印刷方法、加工のことも知ることができて、プラスなことしかなかったと思います。
おか：そこから今のインスタレーション的な展示につながっていった？
山口：そうです。さっきの薬局の看板も印刷できるとは思っていなかったので。こういうところから知識を得て、今回の展示に活かせています。
おか：図録のデザインから視野を広げてあれだけの作品ができたということですね。ありがとうございました。

前川琴瑚さん

宮本美紗季さん

山口和真さん

## アトリエにあるもの

最後は「アトリエにあるもの」をみなさんに持ってきていただきました。アーティスト自身のイメージやアトリエのイメージを想像していただきたいと思います。

上続：私の場合は写真を撮って、それをパソコンで処理をするという工程しかないので置いているものが本当になくて。カメラを持って来ました。
おか：いつ頃に購入したカメラですか？
上続：学部の３回生の時に買ったものです。
おか：同級生でも持っているカメラは違ったりするんですか？
上続：やっぱりお金がある子とかはすごく良いカメラを何台も持ってきているというのは１回生の時に目の当たりにしました。その時私は高校２年生の時にバイト代を貯めて買った安いカメラを使っていました。２年間使っていましたが、先生に変えたほうがいいかも。と言われてこのカメラに変えました。
おか：やっぱり違いましたか？
上続：全然違いました。カメラが違うことで、技術的な話ですけど、光の入り具合が全然違いました。それが私の今の作品にも影響しています。私の作品は光が全面的に出てくるものが多いので、このカメラでよかったなと思います。
おか：相棒みたいなものですね。今も写真は毎日撮っているんですか？
上続：撮っています。
おか：何百枚何千枚撮って使えるのは１枚とか２枚とかよく言いますよね。やっぱりそういうものですか？
上続：私の場合はそこまで厳選していないですね。量はすごく撮るとは思います。卒業制作のポートフォリオが330ページになったので。量は撮るけど、その中から１枚というわけでもないです。
おか：これからも頑張ってください。ありがとうございました。次は徳永さんです。

徳永：絵の元となっている紙人形と、オーブンで温めたら縮んで出来上がるプラ板で作ったものです。なぜこれを持ってきたかというと、最初に油絵の中に紙として女の子を入れようと思いついたのが、これを眺めてぼーってしていた時でした。今まで漫画を「どこからどう展開しようかな。」という風に悩んでいたんです。その時に絵の具で色を漫画につけてみたりとか、紙を色紙にしてみたりしていたんですが、その中にプラ板があったので、試しに線をなぞって焼いて、出来上がったものを見ていました。「何にも使えないな。」という風に思って見ていたんですけど、持ち上げて見ていた時に周りの景色と一緒に平面のままいることを目にして、「じゃあ紙のまま入れてあげればいいんだ。」と思いついたきっかけだったので、これをアトリエに置いてたまに眺めています。
おか：紙だったら向こう側は透き通ってないですからね。見え方も違いますよね。だからこの作品は少し薄い？
徳永：今まで背景と女の子が分離しているように感じていたので、背景を透けさせることでより画面の中で現実と漫画の女の子が一体化するかなと考えました。
おか：これをパズルのように組み合わせていったりしながら、作品はどんどんできていくということですか？
徳永：そうですね。ちっちゃい理由は、漫画の線の、つけペンの線というのをここで描いて、それを拡大することで線の太さとかを一緒にして再現しようと。
おか：ありがとうございました。次は長田さんです。
長田：マッサージ機とマッサージボールです。床に置いて背中とかにも使います。私の作品を見ていただいたら分かると思いますが、ひたすらに地道な作業なんです。

おか：そうですね。
長田：写真でお見せしたように、アトリエに毎日。お昼を除いたら８時間とかずっと同じ体制で作業し続けるという、そういう制作の性質があるので、肩とかかなり凝るんです。本当に痛すぎて動けなくなるので、その度これでマッサージしていました。
おか：これは足の？
長田：座っていると作業ができなくなるぐらいしんどくなった時はこれを足元に置いて足のマッサージをしながらまた机で制作をするということで、使い分けています。
おか：どれぐらい使用しているんですか？

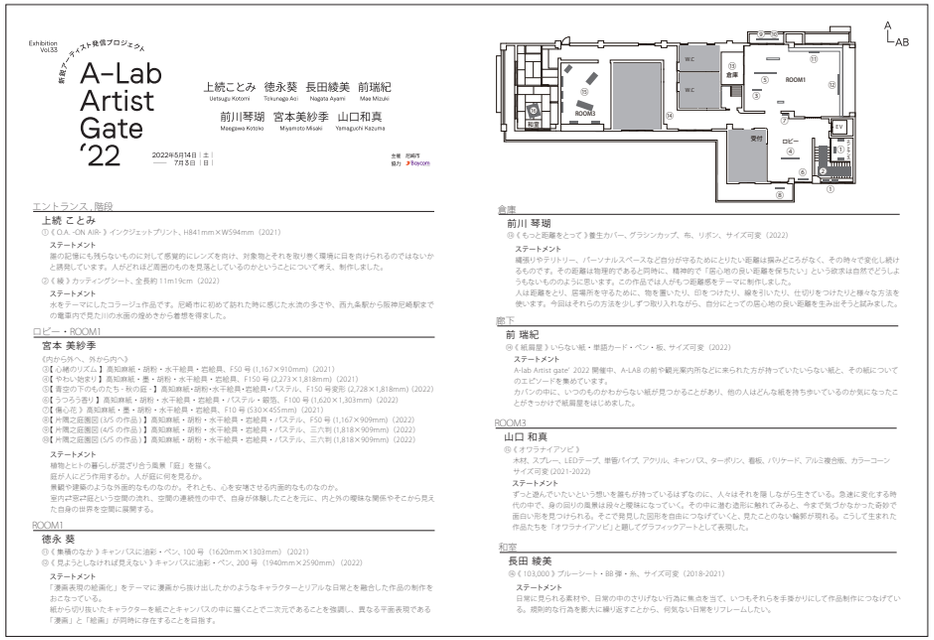
長田：大学院の２年間はずっとありましたし、同じものも２、３個は持っていますね。毎日ひたすら作業を。
おか：体力勝負ですね。身を削って制作する。
長田：そうですね。自分の中で誰にも負けないことが作業を続けることなんです。
おか：もちろん体力も必要ですけど、次の日には０に戻して作業ができる体を作らないといけないですよね。ありがとうございました。それでは前さん、これは？
前：「マッキー」です。私は今はアトリエとかはなくて、大学に通っていた時も大学にも家にもいる時間があまりなくて、外にいることが多かったです。銭湯でワークショップをした時に、これをずっと持ち歩いていました。結構いろんな年代の方がいたんですが、子供でもおじいちゃんおばあちゃんでもすごい持ちやすいです。
おか：すぐ描けますしね。
前：銭湯でワークショップを行ったときにそのことに気

付いてからよく持ち歩いています。
おか：全てがコミュニケーションツールですよね。相手を引き出すためのツールの１つとなっているんですね。
前：子供とかはすごい喜んで使ってくれます。握っても描けるので。
おか：その銭湯のワークショップでは何を書いてもらっていたんですか？
前：「今日の晩御飯」を教えてもらっていました。
おか：その日の晩御飯を絵に描いてもらったり、文字を書いてもらったり？
前：はい。
おか：どんなものがありましたか？
前：色々ありますけど、ハヤシライスとか。検査前で21時までに食べないといけないとか。
おか：その人となりも見えてくるわけですよね、晩御飯を聞くだけで。
前：聞くまではわからなくて。番台のアルバイトもしているのですが、私の前のシフトのおばあちゃんは今日の天気をいつも聞いているんです。「今日暑いね。」といつも言っていて。その短い質問だけでいろんな話ができるのが羨ましいなと思って、私は晩御飯を聞いてみようと。
おか：ありがとうございました。前川さんのアトリエにあるものはなんでしょうか？
前川：今、大学院で版画専攻にいるので、版画の試し刷りを持ってきました。印刷の技術を研究してファイルにまとめるという課題があって「印刷で何ができるのかな？」と考えた時に、最初に紙を折り込んでから上に印刷して開いたら。イメージがバラバラになって面白いかな？という試作品です。

おか：成果はありましたか？
前川：自分が興味を持っていることが、こういう試していく中で気づいたりもします。
おか：試行錯誤することによって次のステップに進んでいくという感じですね。ありがとうございました。宮本さんお願いします。なんでしょうか？
宮本：ノートと岩絵具を持ってきました。
おか：ノート？
宮本：ノートは必ず持ち歩いています。これはもう何冊目になるか分からないんですけど。
おか：これはスケッチブックのようなものですか？
宮本：スケッチもあったり展覧会の DM とかが挟まっていたり、仕事のこととかも全部ぐちゃぐちゃに書かれています。自分の頭の中のものを全てこのノートに発散するというか。頭がぐちゃぐちゃになってしまうと何も思いつかない、整理ができないので、なんでも思いついたものはここに書いて、それをアトリエの中で見返したりすると、あの時こう思って面白かったとか。ちょっとこれ作品にしてみたいな。とか思いついたりもするので、全てこのノートに書き留めるという感じです。

おか：絵が描かれているのが少し見えました。
宮本：スケッチしたものとかを「一度絵にしてみようかな。」というので描き出してみたりしたものですね。
おか：何冊目ぐらいになりますか？
宮本：6、7 冊ぐらいですかね。絶対に白紙のものを選んでいます。ノートの横線が入っていると、それが邪魔になってしまって。絵でも言葉でもなんでも、すぐ書き留められるように白紙のノートを使っています。
おか：僕らもネタ帳というものがありますが、全く同じ発想ですね。思いついたキーワードをちょこちょこと書いて寝るんですよ。朝起きたらなんのことか分からなくて。「なんでこんなこと書いたのかな？」ということがよくあるんですけど、そんなことはないですか？
宮本：よく分からない文字とかもあったりして、なんだこれ？ってなります。
おか：ありがとうございました。最後は山口さん。何をお持ちいただいたんでしょうか？
山口：古本とかガラクタを持ってきました。
おか：これは制作のヒントになるということですか？
山口：制作には全然使わなくて関係ないですけど、80 年代とかのデザインがすごい好きで。行き詰まった時とかに見たりします。人の顔を引き伸ばしてプリントとか普通はしないんですけど。ちょっとネガティブになった時とかにこういうのを見ると「なんでもありだな。」とポジティブな気持ちになることができます。
おか：なるほど。
山口：色使いとかが好きで、ここからインスピレーションを受けたりもしています。
おか：確かに山口さんの世界観と通じる部分を感じます

ね。まさかこういったものが作品につながっているとは思いませんでした。ありがとうございました。出展作家のみなさんとトークを行ってまいりましたがいかがでしたでしょうか？この 7 人の応援のほどよろしくお願いします。ありがとうございました。



Exhibition Vol.33 新鋭アーティスト発信プロジェクト

# A-Lab Artist Gate '22

上続ことみ Uetsugi Kotomi　徳永葵 Tokunaga Aoi　長田綾美 Nagata Ayami　前瑞紀 Mae Mizuki
前川琴瑚 Maegawa Kotoko　宮本美紗季 Miyamoto Misaki　山口和真 Yamaguchi Kazuma

2022年5月14日｜土｜
7月3日｜日｜

企画 尼崎市
協力 Bacom

エントランス，階段

**上続 ことみ**

①《O.A.-ON AIR-》インクジェットプリント、H841mm×W594mm（2021）

**ステートメント**

誰の記憶にも残らないものに対して感覚的にレンズを向け、対象物とそれを取り巻く環境に目を向けられるのではないかと感覚しています。人がどれほど周囲のものを見落としているのかということについて考え、制作しました。

②《綾》カッティングシート、全長約11m19cm（2022）

**ステートメント**

水をテーマにしたコラージュ作品です。尼崎市に初めて訪れた時に感じた水流の多さや、西九条駅から阪神尼崎駅までの電車内で見た川の水面の揺めきから着想を得ました。

ロビー・ROOM1

**宮本 美紗季**

《内から外へ、外から内へ》

③【心地のリズム】高知麻紙・顔彩・水干絵具・岩絵具、F50 号（1,167×910mm）（2021）
④【やわらぎ歩き】】高知麻紙・墨・胡粉・水干絵具・岩絵具、F150 号（2,273×1,818mm）（2021）
⑤【青空の下のものたち・秋の庭 -】高知麻紙・胡粉・水干絵具・岩絵具・パステル、F150 号変形（2,728×1,818mm）（2022）
⑥【うつろう香り】高知麻紙・胡粉・水干絵具・岩絵具・パステル・銀箔、F100 号（1,620×1,303mm）（2022）
⑦【集心花】高知麻紙・墨・胡粉・水干絵具・岩絵具、F10 号（530×455mm）（2021）
⑧【片隅之庭園図（3/5 の作品）】高知麻紙・胡粉・水干絵具・岩絵具・パステル、F50 号（1,167×909mm）（2022）
⑨【片隅之庭園図（4/5 の作品）】高知麻紙・胡粉・水干絵具・岩絵具・パステル、三六判（1,818×909mm）（2022）
⑩【片隅之庭園図（5/5 の作品）】高知麻紙・胡粉・水干絵具・岩絵具・パステル、三六判（1,818×909mm）（2022）

**ステートメント**

植物とヒトの暮らしが混ざり合う風景「庭」を描く。
庭が人にどう作用するか。人が庭に何を見るか。
無縁や連鎖のような外面的なものなのか。それとも、心を安堵させる内面的なものなのか。
室内⇄庭⇄庭という空間の流れ、空間の連続性の中で、自身が体験したことを元に、内と外の曖昧な関係やそこから見えた自身の世界を空間に展開する。

ROOM1

**徳永 葵**

⑪《無構のなか》キャンバスに油彩・ペン、100 号（1620mm×1303mm）（2021）
⑫《見ようとしなければ見えない》キャンバスに油彩・ペン、200 号（1940mm×2590mm）（2022）

**ステートメント**

「漫画表現の絵画化」をテーマに漫画から抜け出したかのようなキャラクターとリアルな日常とを融合した作品の制作をおこなっている。
紙から切り抜いたキャラクターを紙ごとキャンバスの中に描くことで二次元であることを強調し、異なる平面表現である「漫画」と「絵画」が同時に存在することを目指す。

倉庫

**前川 琴瑚**

⑬《もっと距離をとって》養生カバー、グラシンカップ、布、リボン、サイズ可変（2022）

**ステートメント**

縄張りやテリトリー、パーソナルスペースなど自分が守るためにとりたい距離は揺みどころがなく、その時々で変化し続けるものです。その距離は物理的であると同時に、精神的で「居心地の良い距離を保ちたい」という欲求は自然でどうしようもないもののように思います。この作品ではムがもつ距離感をテーマに制作しました。
人は距離をとり、居場所を守るために、物を置いたり、印をつけたり、線を引いたり、仕切りをつけたりと様々な方法を使います。今回はそれらの方法を少しずつ取り入れながら、自分にとっての居心地の良い距離を生み出そうと試みました。

廊下

**前 瑞紀**

⑭《紙屑屋》いらない紙・単語カード・ペン・板、サイズ可変（2022）

**ステートメント**

A-lab Artist gate' 2022 開催中、A-LAB の前や観光案内所などに来られた方が持っていたいらない紙と、その紙についてのエピソードを集めています。
カバンの中に、いつのものかわからない紙が見つかることがあり、他の人はどんな紙を持ち歩いているのか気になったことがきっかけで紙屑屋をはじめました。

ROOM3

**山口 和真**

⑮《オウラナイアソビ》
木材、スプレー、LEDテープ、単管パイプ、アクリル、キャンバス、ターポリン、看板、パリケード、アルミ複合板、カラーコーン
サイズ可変（2021-2022）

**ステートメント**

ずっと遊んでいたいという想いを誰もが持っているはずなのに、人々はそれを隠しながら生きている。急速に変化する時代の中で、身の回りの風景は段々と複雑になっていく。その中に潜む造形に触れてみると、今まで気づかなかった奇妙で面白い形を見つけられる。そこで見出した図形を自由につなげていくと、見たことのない輪郭が現れる。こうして生まれた作品たちを「オウラナイアソビ」と題してグラフィックアートとして表現した。

和室

**長田 綾美**

⑯《103,000》ブルーシート・88 弾・糸、サイズ可変（2018-2021）

**ステートメント**

日常に見られる素材や、日常の中のさりげない行為に焦点を当て、いつもそれらを手掛かりにして作品制作につなげている。規則的な行為を拡大に繰り返すことから、何気ない日常をリフレームしたい。

A-LAB archive vol.35
Exhibition Vol.33「A-Lab Artist Gate '22」
2023（令和５）年３月　初版第１刷発行

フライヤーデザイン　Studio Spass
発行 編集 制作　尼崎市　文化振興課

A
L
AB

お問合せ先

尼崎市　文化振興課
TEL：06-6489-6385（イベント時　06-7163-7108）
FAX：06-6489-6702
E-mail： amalove.a.lab@gmail.com